

平成22年度第32回「少年の主張」京都府大会

わたしの主張 2010

「少年の主張」京都府大会が9月26日、京都こども文化会館で行われ、府内31校282人の応募の中から事前審査で選ばれた15人（南丹市内から8人）が環境問題や友達、家族との関わりの中で感じる熱い思いなどについて自らの主張を発表。最優秀となる京都府知事賞に、美山中学校3年の片山若菜さんの「当たり前前の幸せを」が輝き、11月に東京で開催される全国大会に京都府代表として推薦されることとなりました。



京都府知事賞

当たり前前の幸せを

南丹市立美山中学校3年

片山 若菜 さん

足が自由に動きます。手も自由に動きます。笑うことができず。思ったことを話すことができます。これらは私にとって当たり前のことでした。

私の両親は早くに離婚し、今私は母と3歳年下の三つ子の妹たち、それにお婆の一家と暮らしています。妹のうちの1人は健康です

が、2人は重い障がいを抱えて生まれてきました。そのうちの1人は養護学校に通っています。最初は「歩けないかも知れない」と言われていましたが、今では歩くことも走ることも、私を蹴ることまでできるようになりました。でもどこかで私は健常者と妹の間に線を引いていたのかも知れません。障がいがあるから、私と同じことができなくてもしょうがないと。そんなある日、学校から帰った妹を迎えた時、妹はその日にあったことを私に話してくれました。「きょうね、あたし学校でカエー（カレー）作ったの。ほーちよー（包丁）でららいも切ったの」12年間妹と暮らしてきた私はあの程度の言葉なら聞き取れるのですが、「ららいも」だけはどうしても分かりませんでした。「え？ららいもって何？」「だーかーら！ららいもやって

ば！」
そんなやりとりを繰り返すうち妹は泣きだしてしまいました。その「ららいも」が「じゃがいも」だと知ったのは母が帰ってきた後のことでした。

妹は障がい者である前に1人の人間なのです。私たちと同じように怒るし、泣くし、笑います。健常者と同じスピードでできないことがすごく悔しくて努力するので。歩けるかさえ心配された彼女は、本を読んだり歌を歌ったり、私と一緒にすることをして一緒に生きています。それは妹が人の何十倍の努力をしてきたからです。言葉を覚え、文字の練習もして、必死に自分の思いを伝えようとしています。もしどこかで諦めていたら今の彼女の生活はないでしょう。そんな彼女を私はとても誇らしく思います。あなたから学んだことは、絶対に諦めない強い心、そして思ったことを人に伝えられる喜びです。

そして、もう1人の妹はもうこの世にはいません。10年前、2歳の時に私たちを置いて天国へ旅立ってしまった。彼女はずっと寝たきりで笑うことすらままならない状態でした。そんな彼女の、手足を動かしたり動作がと